

X'masに"シンバルの星"が鳴る

中村 鎮^{まもる}の建築とガルニエ社のオルガン

春から夏に、文化芸術の面から大阪のシビックセンター（都市の中心地区）である中之島を調べる演習を、大阪大学で開いた。大阪大学中之島芸術センターを拠点としたので、現地見学も自由におこなえる。それに参加したのが、大阪大学人文学研究科で音楽学を専攻する森本恵一君で、彼がテーマとしたのが中之島とその周辺にあるパイプオルガンである。

彼のプランで中之島界隈にある日本基督教団^{キリスト}の教会を見学して回った。西区の川口基督教会、中央区高麗橋の浪花教会などを巡り、北区の天満教会にも足を運んだ。松屋町筋を天神橋筋の商店街側から鳥居をくぐって西に渡った場所に教会はある（最寄り駅、Osaka Metro南森町駅）。

天満教会は明治12（1879）年に創建され、現在の礼拝堂は昭和4（1929）年に建てられた。角柱を並べた玄関などが、どこか懐かしいと思ったら、外観が東心斎橋にある島之内教会とそっくりなのである。私の生家は島之内にあり、子どもの頃からよく島之内教会の付近を通るので、既視感があったのである。

二つの教会が似ているのは、それもそのはずで、どちらも中村鎮（1890～1933）の設計であった。中村は「中村式鉄筋コンクリートブロック構造」を開発した建築家であり、「中央美術」や「建築評論」などの専門誌に執筆した批評家でもある。

以下は天満教会のオルガン奏者でもあり、FM大阪の「なにわルネサンス『おとなの文化村』」にも出演して、オルガンについて熱く語った森本君からの受け売りだが、天満教会では、1970年代ごろからパイプオルガンの設置を希望したが、建物が古く、オルガンが重すぎて一度断念したという。それが平成24（2012）年に耐震補強、保存改修とバリアフリー化を行ったことで設置可能となり、フランスのガルニエ社のものを導入することになった。ガルニエ社（日本ではガルニエオルガナム有限公司）は、バロック時代のオルガンを作るのを得意とし、東京芸術劇場（東京都豊島区）のオルガンでも有名である。



中村鎮による天満教会の建築。四角い柱が並ぶのが特徴的。

ただし、オルガン完成までの道のりは大変で、天満教会に特徴的な天井のアーチに沿う形で設計されたが、床が波打っていて、天井いっぱい設計されたパイプが計算通りに合わず、パイプをはめ込むための木材を削る作業を繰り返したという。また、左右対称にパイプが並ぶのではなく部屋の右側に寄せたオルガンの形状なので、音のバランスを整える作業（整音作業）に2か月半近くかかってしまう。

こうした苦労を経て完成したオルガンは、パイプが1038本もある大きさで、オルガン本来の音から、トロンボーンやファゴットを模した音まで17種類もの音色が出すことができる。森本君に言わせると「このオルガンの一番輝くのはバロック時代、特にバッハの曲を演奏した時」であるらしい。

約5メートルある太いパイプからの重低音は、耳で聴き取る以前に体が空気の振動でゆさぶられ、しびれてしまうように圧倒的であるし、オルガンの側面にとりつけられた星をデザインした「ツィンベルシュテルン」（“シンバルの星”）はかわいらしい（写真参照）。回転して、中の鈴が鳴る仕掛けで、クリスマスなどでよく用いられるという。



オルガンの側面にある“シンバルの星”。回転して中の鈴が鳴る。

さて今回、大阪の教会の存在を再認識できたが、教会前の鳥居筋は、天神祭の陸渡御^{りくとぎよ}が通る道である。不信心モノと叱られそうだが、森本君の説明を聞きながら私は、賑やかな陸渡御の音楽が、パイプオルガンの重低音にのって協奏しあう、この街にしかない独特の音風景を妄想してしまった。

天満教会のコンサート情報をはじめ、パイプオルガン設置の経緯や楽器の特色の説明、組み立てた時の動画が教会のホームページにあるのでご覧ください（<https://www.temma.or.jp>）。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス／モダン都市の現像—』（創元社）など。